

読み聞かせの実態と 言葉の発達

— 幼児期から小学生の家庭教育調査 —

ベネッセ教育総合研究所では、幼児期から小学生の子どもをもつ母親を対象に、幼児期から児童期における家庭教育と子どもの育ちとの関連を捉えることを目的とした追跡調査を、2012年より継続的に実施しています。今回は調査結果の中で、幼児期の読み聞かせと児童期の言語発達との関連について取り上げます。

親子間での読書体験の共有が 将来につながる言葉の力を育む

目白大学 人間学部 子ども学科 准教授

荒牧美佐子先生

あらまき・みさこ

専門分野は発達心理学。乳幼児をもつ母親の育児感情、園における子育て支援の効果検証、幼児期の家庭教育が子どもの発達に与える影響などについて研究を行う。本調査の監修者の1人。



今回の調査から、幼児期の読み聞かせ体験が豊かだった子どもほど、小学生になってからひとりで絵本や本を読む（見る）頻度が高い傾向にあることがわかりました（P21 3）。

読み聞かせは子どもにとって、言葉を耳で聞き、文字を目で追い、ときには子ども自身がお気に入りのセリフや擬音を口にするなど、言語を総合的に活用する場です。また、子どもは読み聞かせをしてもらいながら登場人物の心情を想像したり、絵本に描かれていない場面までも想像したりしています。読み聞かせの時間、物語の中に没入し、日常とは異なる世界を楽しみながら、子どもは視野を広げ、思考を豊かにしている

のです。読み聞かせを通じて本を好きになり、本を読む力の素地が育まれていることが、子どもの読書習慣の確立につながっていると考えられます。

さらに忘れてはいけないのは、読み聞かせを通して、保護者などの大人と会話をしたり、読書体験を共有したりすることの大切さです。今回の調査では、読み聞かせの際に、保護者と本の感想を話し合ったり、内容を実際のできごとに結びつけて話し合ったりするような双方向の体験をじっくりと積むことが、小学生以降の児童期の論理性や言葉のスキルに影響することがわかっています（図）。書かれている内容を読むだけでなく、「次どうなると思う？」「どうしてこうなったのだと思う？」などと子どもの考えを聞いたり、「このあと、こうなったんじゃないかな」と保護者の考えを話し合ったりすることで、子どもの論理性や言葉のスキルが育まれていくのです。

大人の言葉の力は子どもとは比較にならないほど豊かですから、読み聞かせをきっかけに家庭での会話の機会を増やすことで、子どもが保護者からも言葉の力を獲得し、絵本以外にも言葉の世界を広げていくことは容易に想像できます。

そのように考えると、読み聞かせは単に「文字を読



「幼児期から小学生の家庭教育調査」の調査概要

調査対象：子どもが年少児から小学4年生までの縦断調査に7年間参加した母親 402人

調査テーマ：幼児期から小学生の子どもの生活、学びの様子と保護者のかかわりや意識

調査時期：2012年1月～2018年3月(全7回)

調査地域：全国

調査方法：郵送法(自記式アンケートを郵送により配布・回収)

調査内容：学びに向かう力・生活習慣・学習準備等の実態/母親の養育態度・母親の関わりなど

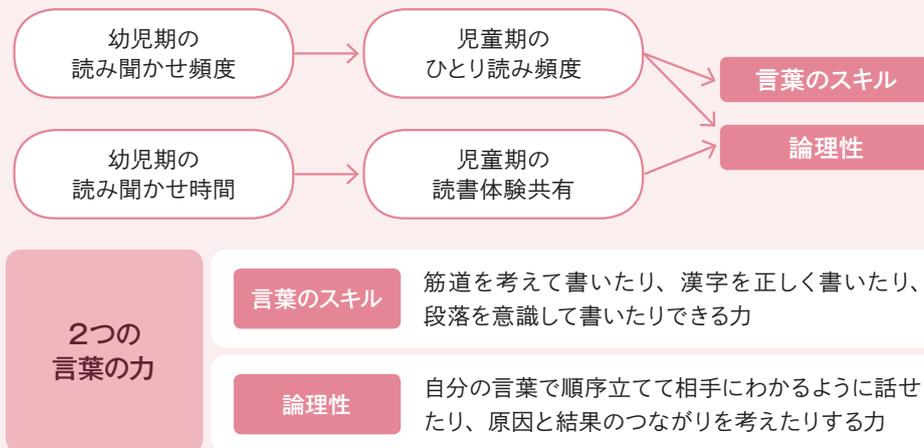
引用・転載時のお願い 本調査の結果を引用・転載される際には、調査名称を記載してください。本調査の引用時の名称:ベネッセ教育総合研究所「幼児期の家庭教育調査」(2018)

詳しい調査結果はこちらからご覧になれます。▶ <https://berd.benesse.jp/> または

ベネッセ 家庭教育調査

検索

図 幼児期の読み聞かせと児童期の言語発達との関連



*「幼児期から小学生の家庭教育調査」の結果をもとに編集部で作成

めるようになる」ことを目標にしたものではなく、保護者との読書体験の共有を通じて、言葉を使って豊かなコミュニケーションをとったり、自分の考えを深めたりする場でもあるといえそうです。

児童期になると、読み聞かせの頻度は減っていきま(P20)。文字を覚え、保護者のサポートがなくてもひとりで本を読めるようになると、「文字を読めるようになったのだからひとりで読んだ方がよい」と考える保護者が増えることなどが理由でしょう。ただ、文字を読めることと、書かれている内容を理解するこ

本調査からわかったこと

- 幼児期の読み聞かせの頻度が高いほど、児童期のひとり読みの頻度が高まる。そして、児童期の中でも小学4年生以降のひとり読みの頻度の高さは、言葉のスキルや論理性の獲得に影響を与えている。
- 幼児期の読み聞かせで、内容について質問したり、子どもの質問に答えたりするという双方向のやり取りに時間をかけているほど、児童期にも本について保護者と話し合ったり、感想を述べ合ったりするという読書体験を共有する時間が長くなる。そして、児童期の読書体験の共有時間の長さは、論理性の獲得に影響を与えている。

とは違います。早い時期からひとりで読んでいても、それだけで言葉の力が高まるわけではないのです。

重要なのは、ひとり読みをするかどうかよりも、本の内容を味わったり、書かれていることを実際のできごとに結びつけて考えたりすることです。そうした子どもの読書体験を支える上で、幼児期から小学校低学年での読み聞かせが役に立つでしょう。ひとり読みに慣れた子どもについても、保護者が読み聞かせを行うことで子どもの読書体験の伴走者となり、豊かな読書習慣の確立につながっていくと考えています。

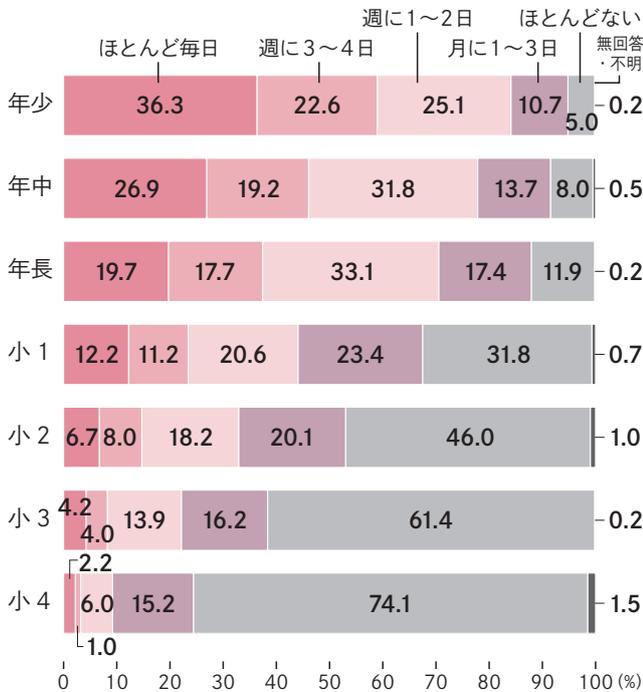
先生方へ

言葉の力を伸ばそうとするあまり、「毎日10分続ける」などと読み聞かせが義務になってしまうと保護者には負担となり、子どもにとっても楽しい時間になりません。「読んで!」と子どもが言ってきたときに可能な範囲で読んであげればよいですし、保護者も、自分の時間に余裕があるときに「絵本読もうか?」と声をかければよいのではないのでしょうか。そして、子どもが絵本の世界にのめり込み、保護者も読み聞かせを楽しめるときは時間を気にせず、たっぷりと読んであげればよいでしょう。読み聞かせは、子どもも大人も楽しむことが大切だということを、先生からも保護者に伝えていただきたいと思います。



1 絵本や本の読み聞かせ頻度

読み聞かせの頻度は、
学年とともに低くなる



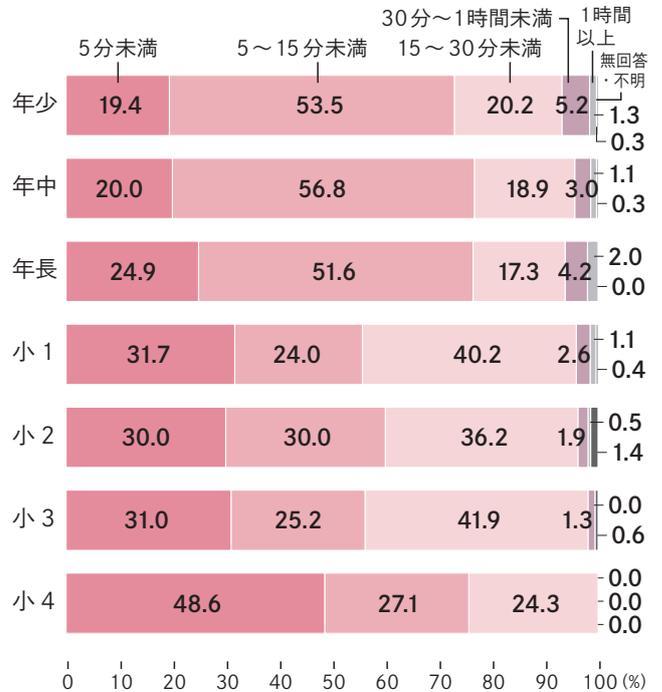
絵 本や本の読み聞かせの時間と頻度について、学年別で比較しました。読み聞かせの頻度については、「週に3~4日」以上の家庭が年少児で約6割、年中児で5割近くとなりました(1)。また、読み聞かせの時間については、年少児・年中児をもつ家庭で、1日に5分以上の読み聞かせをしている割合がおおよそ8割でした(2)。

一般に、子どもの学年が上がるにつれて、読み聞かせの頻度や時間は減少する傾向にあります。例えば読み聞かせの頻度では、保護者が週に1日以上読み聞かせをする割合は、年長児では約7割ですが、小学1年生で4割強、小学2年生で約3割、小学4年生では約1割と徐々に減少していきます。子どもがひとりで文字を読めるようになっていくにつれて、その様子を見て、読み聞かせの機会を減らしていく保護者が多いのではないかと考えられます。

また、1日の読み聞かせ時間のグラフ(2)では、小学校入学以降に「15~30分未満」の層が増加しています。

2 絵本や本の読み聞かせ時間(1日)

幼児期の読み聞かせは
多くの家庭で1日5分以上



※読み聞かせが「ほとんどない」を除く。

このグラフは読み聞かせをしている保護者のみが対象であるため、小学1~3年生で読み聞かせを続けている保護者は、4割前後が1日15~30分未満の読み聞かせをしていることを示しています。全体の傾向としては、小学1年生以降に読み聞かせをする割合は減少していることから、熱心な保護者であることが推測されます。また、小学生になり絵本から幼年童話などへ、読み聞かせをする内容に広がりが出てきていることも考えられます。

荒牧先生
から

子どもが成長するにつれ、読み聞かせの頻度や時間が少なくなるのは当然のことかもしれませんが、ただ、子どもの読書体験を豊かにするために園ができることはたくさんあります。例えば、複数の子どもたちへの読み聞かせで活発なやり取りを楽しむことや、家庭では用意することが難しいさまざまな絵本をそろえることなどは、読書への興味を高めるきっかけになるはずですよ。

ベネッセ教育総合研究所次世代育成研究室 室長/主席研究員

高岡純子 たかおか・じゅんこ



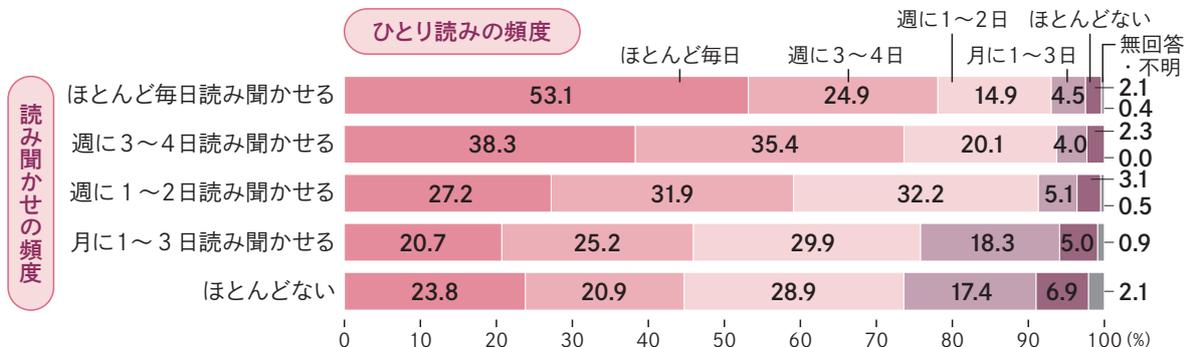
乳幼児領域を中心に子ども、保護者、園を対象とした意識や実態の調査研究、乳幼児とメディアの研究などを担当。文部科学省・幼児教育に関する調査研究拠点の整備に向けた検討会議委員(2015年度)、三重県・家庭教育の充実に向けた検討委員会委員(2016年度)などを務める。

データ解説・本調査の担当

3

読み聞かせの頻度とひとり読みの頻度との関連

読み聞かせの頻度が高いほど、ひとり読みの頻度も高くなる

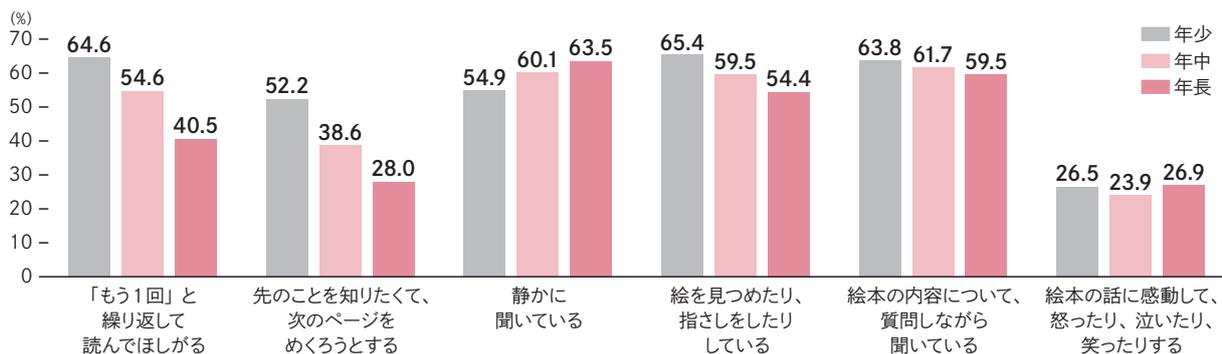


※「読み聞かせの頻度」は年長児、「ひとり読みの頻度」は小学1年生。

4

読み聞かせをしているときの子どもの様子

読み聞かせを通して、子どもは保護者とのやり取りを楽しむ



※1 グラフの数値は、「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

※2 複数回答。

保護者が子どもに読み聞かせをする頻度は、子どもの学年が上がるにつれ減少していきます。そこで、年長児から小学1年生にかけてのひとり読みの様子について見てみると、子どもが年長児のときに読み聞かせを「ほとんど毎日」していた場合、小学1年生になった子どもがひとりで絵本や本を読む（見る）頻度は「ほとんど毎日」が5割を超えました(3)。読み聞かせの頻度が「週に3~4日」「週に1~2日」と減るほど、小学1年生での子どものひとり読みの頻度も減っており、保護者の読み聞かせが、子どもの絵本や本への関心を高め、ひとり読みの習慣につながっていくことがうかがえます。

4のグラフは、読み聞かせをしているときの子どもの様子について聞いたものです。学年が上がるとともに「『もう1回』と繰り返して読んでほしい」「先のことを知りたくて、次のページをめくろうとする」様子は徐々に減り、「静かに聞いている」態度が増えていきます。また、5~

6割の子どもの「絵を見つめたり、指さしをしたり」し、6割前後は「絵本の内容について、質問しながら」聞いています。多くの子どもが、保護者とのやり取りを楽しんでいる様子が見えます。このようなやり取りの時間を通して、想像する力や思考する力の土台が育まれていきます。園の先生方が、そうした幼児期の読み聞かせの意味について、保護者に伝えていくことも重要になるでしょう。

荒牧先生から

子どもはお気に入りの絵本を繰り返し読んでもらいたがるものです。それは、大好きな場面やセリフから登場人物の気持ちや考えをイメージすることで、思考を深めたり、言葉のリズムの心地よさを味わったりするのが楽しいからでしょう。言葉のスキルの獲得を重視するあまり、保護者はいろいろな絵本を与えたくなくなるかもしれませんが、お気に入りの1冊にのめり込む意味を、保護者にも理解してもらいたいですね。